



研究領域名 「当事者化」人間行動科学：相互作用する個体脳と世界の法則性と物語性の理解

東京大学・医学部附属病院・教授

かさい きよと
笠井 清登

領域番号：21A101 研究者番号：80322056

【本研究領域の目的】

認知科学は人間の認知行動と脳基盤について、社会を所与の定数として分析してきた。しかし予測困難で一回性の現実世界と切実に向き合う人間の当事者性を扱うには、個体脳—世界相互作用を組み込んだ学術変革が必要である。身体や認知特性の多数派にとって予測しやすいよう作られた世界にマッチしない少数派特性に苦悩する人々は、当事者研究により自らの持つ法則性／物語性と世界のそれらとの不一致に気付くことが回復への緒であるという知を生み出した。これに学び本研究領域では法則性／物語性を次のように考える。人間が世界と相互作用する際に、同じ事象が多数回繰り返されるとそれを脳により法則的に内在化し、次の状況予測に生かすことを法則性と定義し、集団としては人工物や規範を生み出し、世界を法則化している。一方、世界における一回性の事象を、時空間的に始点と終点をもつエピソード・位置とその推移として内在化することを物語性と定義し、集団としては物語の集合としての歴史が作られ、個体は歴史の中に自己を定位する。このように定義すると、ヒト以外の動物でも脳により環境や事象を認識し内在化する基本的様式はこの二次元である可能性がある。さらに、人間が、予測が難しく思い通りになり難い現実世界と切実に相互作用する際に世界に法則性や物語性を見出し内在化する認知過程を「当事者化」と定義する。この相互作用する個体脳と世界の法則性と物語性の理解に基づき人間の当事者化の思春期発達過程と機構を、学術者自身の当事者化と少数派特性を持つユーザー研究者との共同創造、及び大集団科学と脳行動科学を融合する学術変革により解明する。

【本研究領域の内容】

本研究領域は、人間の当事者化のプロセスの行動基盤を、個体脳—世界の相互作用性及び法則性／物語性に基づいて解明する。個体脳—世界の性質をA. 相互作用性と、B. 法則性／物語性に分け、その過程と機構をそれぞれA. 大集団科学、B. 個体脳行動科学を用いて検討したうえで、それらを統合して当事者化との関連を考察するストラテジーを取り、これらを計画研究の大分類とする。

【A01】大集団脳科学により、個体脳—世界相互作用ループの計算脳科学的モデルを構築する。

【A02】脳科学的モデルを思春期大集団コホートに適用し、人間が当事者化し、世界に主体的にコミットする思春期発達過程のプロセスを実証する。

【A03】A01とA02から得られた個体脳—世界相互作用ループの動態に、さらに時代・世代・ジェンダーの交互作用的影響を明らかにする。

【B01】当事者化における個体脳—世界の法則性／物語性のアンマッチ・再マッチの行動基盤を明らかにし、その知見に基づいて当事者化を促進するプログラムを開発する。

【B02】B01との双方向的連携により、当事者化において個体脳が世界の法則性／物語性をどのように個体内に内在化しているかの脳基盤を明らかにする。

【X00】学術者が市民と分離することにより観察者となり、市民を「対象」として、多数派（マジョリティ）向けの社会デザインに資する研究を行ってきた学術史を転換する。具体的には、学術者の当事者研究ワークショップを通じて、学術者自身が非当事者状態から当事者化するとともに、研究のデザインの段階から研究の共同創造をユーザー研究者とともに行う。

【期待される成果と意義】

本研究領域により、①学術の目的の変革と知の更新、②学術の対象と方法の変革という成果と意義が期待できる。

①については、個体脳—世界相互作用ループの加速による現代の世界の多数派—少数派問題の解消に向けて知を更新するとともに、人間が当事者化し主体的に世界にコミットする過程の解明と教育・社会方策を示唆することが期待される。

②については、個体脳—世界の法則性／物語性理解という文理で合意できる研究パラダイムによる真の学融合が期待される。また、世界に対する作用としての行動の再定義と、個体脳—世界の相互作用性を自覚した人間行動科学 Interaction-informed human behavioral science (IIHBS) を提唱する。さらに、非当事者状態にあった学術者の「当事者＝研究者」化と研究の共同創造の具体的実装方法を学術界に普及することが期待される。

【キーワード】

個体脳—世界相互作用、法則性、物語性、当事者化、思春期、学術の共同創造

【領域設定期間と研究経費】

令和3年度—7年度
1,088,700千円

【ホームページ等】

<https://tojishaka.net/>